

魅惑の社長に誘淫されて
陥落させられました

有允ひろみ

Hiromi Yuuin

目次

魅惑の社長に誘淫されて陥落とせられました

5

書き下ろし番外編

惑溺の子育てライフ

329

魅惑の社長に誘淫されて

陥落させられました

頑張っても、報われるとは限らない。

二十九歳の誕生日に、はらだなおお原田奈緒は身に染みてそう感じていた。

一人ぼっちの夜を迎えているのは、出張先の関西にあるビジネスホテルの一室。プレゼントもバースデーケーキもなく、あるのはコンビニの幕の内弁当と缶ビールのみ。

あと五時間で今日が終わるというのに、一度も本気で笑わないまま一日が過ぎようとしている。

「結婚するって言ってたのに……」

ほんのひと月前、同い年の彼氏に浮気された。

その人とはすでに同棲して四年目、付き合って七年が経っていた。

商社マンの彼は優しく穏やかな人で、そろそろ結婚をしようと話し合って一緒に式場を探していた最中だったのだが……

『ごめん。実は別の女性との間に子供ができてしまっ……』

土曜日の朝、一緒に朝食を食べている時にそう言われ、頭の中が真っ白になった。しかも、その日の午後には彼の子を身ごもったという女性と対面させられ、人生最大の心理的修羅場を迎えたのだ。

『長すぎた春、つてやつですね。それにこの人、彼女さんの事、もともとタイプじゃなかったみたいですよ。あ、もう元カノさんになっちゃいましたけど』

元カレの部下で奈緒より五つ年下の彼女とは、以前参加した彼の同僚主催のバーベキューパーティーで一度顔を合わせた事があった。

当時は小柄で大人しそうな印象だったのに、二度目に会った彼女は、ふてぶてしい雌猫に変わっていた。

『見た目もアレだけど、性格も可愛くないんですってね』

『それに、あっちのほうもイマイチだつて。それって、もう致命的ですよねえ』
母子手帳とエコー写真を見せられている間も、さんざんな言われようだった。

容姿ばかりか、性格や性生活の愚痴まで浮気相手に垂れ流しにしていたなんて——
反論しようにも、思い当たる節がありすぎて適当な言葉が見つからない。何より、あまりのショックで言い返す心の余裕もなかった。

『君は仕事ばかりで、ちっとも僕を構ってくれなかった。だから、寂しかったんだ』

『最近は、ただ一緒に住んで、同じベッドで寝るだけだったよな。たまにシても、ぜんぜん気持ちよくないし、そりゃあ浮気のひとつもしたくなるよ』

せめて申し訳なさそうにしてくれていたらまだマシだったのに、元カレは完全に開き直って彼女の言葉を全面的に支持するような態度だった。

『それに比べて、彼女はどこをとっても可愛くて身体の相性も抜群なんだ』

元カレと顔を見合わせると、今カノが満面の笑みを浮かべながらお腹をゆつくりと擦った。

『見てのとおり、私達ものすごく愛し合ってるんです。ここは潔く身を引いてくれませんか？ お互い大人なんだし、これ以上みじめになるのはやめましょうよ』

まったく悪びれる様子のない態度を取られたばかりか、元カレ達は奈緒を見下すような視線を向けてきた。その上、まるで二人きりであるかのように見つめ合い、ベタベタと身体を寄せ合って仲の良さをアピールしてくる。ただでさえメンタルがボロボロなのに、さらに極限まで追い詰められてしまつては、返す言葉すら見つからない。

結局は終わりにせざるを得なくなり、茫然自失になっている間に元カレは新しい彼女と出て行ってしまった。

「帰りに慰謝料として百万円を置いていかれたが、そんなものほしくない！」

よっぽど彼の個人口座に返金してやろうと思つたが、親友の美夏に相談したところ当

然の権利だから受け取っておけと言われた。

「なんで浮気なんか……。結婚すると思つていたのは私だけだったの？」

四年も一緒に住んでいると、さすがに毎日キスやハグをする事はなくなつていたし、同じベッドに寝ていてもずいぶん前からセックスストレスだったのも確かだ。

だがそれは、元カレがもともと淡泊だったせいであり、てっきりそういう行爲があまり好きではないのだと思つていた。

別にそれでもいいと思つていただけけど、友達から「さすがにヤバイ」と指摘され、奈緒から誘つてみた事もあった。しかし、かなりの頻度で断られて、そのたびに気まずい雰囲気の流れていた。

自然と誘う回数も減つていったし、たまにじゃれついても疲れたとか眠いとか言われる。もしやもう行爲自体が面倒になったのかと思つていたが、実際はほかで欲情して発散していたのだ。

「確かに、仕事を優先しすぎたかもしれない……。でも、だからって浮気するなんてひどすぎる！」

奈緒は自身が立ち上げた化粧品メーカーの社長だ。けれど、まだまだ小さな会社だし、社長とはいえ、たいいていの事は自らこなさなければならぬ。当然営業にも回らねばならず、今回の出張も新しくパートナーショップになつてくれそうな店を開拓するためだ。

「おまけに種まきまで……。私の何が不満だったのよ。今カノが言ったように、私がタイプじゃなくてイマイチだったから？ そうだとしても、二人の七年間をドブに捨てるような別れ方をしなくともいいじゃない！」

振り返ってみれば、いろいろとおかしな点はあった。けれど、まさか結婚の話が出ている相手に浮気されているとは思ってもみなかった。

「三十歳になる前に結婚するって言ったよね？ その言葉を信じてたのに……」

元カレの今カノは、話し合いの時点ですでに妊娠五カ月だと言っていた。身体の関係ができたのはバーベキューパーティーの直後だったらしい。

つまり、元カレは付き合ってから六年目の夏に浮気をして、一年近くそれを隠し続けていたという事だ。

ともに暮らし結婚の話をしている間も、元カレは何度となく今カノとベッドをとともに、自分の事をあざ笑い悪しざまに言っていたのだろう。

そんな事ができる神経がわからないし、想像するだけで吐き気がしそうだ。

「馬鹿みたい……。何も知らずに自分から誘ったりして……。身体だけじゃなくて心まですかに移ってたんだから、応じるわけじゃないっ……。！」

奈緒は特別性欲が強いわけではない。それでも元カレは特別な存在だったし、抱き合うだけで幸せだった。

昔はかなりラブラブのカップルだったのに、いつの間にもすれ違ってしまったのだろうか？

仕事を終えてホテルに戻った今、ことさら独り身の寂しさが募る。

お腹は減っているはずなのに、買ってきた弁当に箸をつける気にもならない。手持ち無沙汰に缶ビールを開けようとした時、美夏が電話をかけてきた。

『やつほー、奈緒。お誕生日おめでとう！ 遅くなってごめんね。ところで、新しい彼氏できた？ まさか、ハッピーバースデーの日にとりほっちとか言わないよね？』

都内でエステティックサロンを開いている彼女は、奈緒とは幼馴染でもあり、なんでも話し合える仲だ。独り身で彼氏がいないのは同じ。けれど、美夏は自由な独身生活を謳歌しており、間違っても男に人生を左右されたりしないタイプだ。

「ありがとう。でも、今出張先において、ポツチ確定。あとは飲んで寝るだけだけど、仕事は上手くいったし、まあまあいい一日だったかな」

あえて明るい声を出したつもりだったが、それがかえって独り身の哀愁を醸し出してしまったみたいだ。

『何よ、空元気なんか出しちゃって。まだ元カレの事を引きずってる感じ？』

「だってまだひと月しか経ってないんだよ？」

『そうだけど、もともとあんな優男、奈緒の好みじゃないでしょ』

確かに、奈緒の好みのタイプは見た目がゴージャスで、手足が長く適度にガタイのいい人だ。

それと、できたら三、四歳上が望ましい。

けれど、なぜか今まで付き合った男性は、全員同じ年か年下の筋肉とは無縁のひよろひよろした人ばかりだった。

『よし、じゃあ私がそこに、誕生日プレゼントを送ってあげる！』

「へ？　ここについて……今から何をどうやって？」

『私が普段、レンタル彼氏を利用しての知ってるでしょ？　あれよ』

「レ、レンタル彼氏？　って、確か『GJ倶楽部』とかいう……』

美夏が普段からレンタル彼氏なるサービスを利用しており、それなりに楽しんでいる事も知っていた。

けれど、奈緒は一度も利用した事がないし、興味もない。

『そう、それぞれ！　GJのGはゴージャスとグッドルッキングのG。JはジェントルマンのJよ。誕生日と一緒に祝うのにふさわしい大人の男性を見繕って派遣してあげる。二十代最後のハピバだし、特別に奮発しちゃう！』

「ちよつ……ま、待つてよ！　私、別に男の人なんか派遣してもらわなくていいから！　第一、私は会員じゃないし、ここは関東じゃなくて関西だよ！』

『大丈夫。「GJ倶楽部」は主要都市に支店があるのよ。それに、私VIP会員だから、いろいろと融通が利くの』

「でも……』

『大袈裟に考えないでいいって。VIP会員じゃないと指名できない、とびきりゴージャスでグッドルッキングなジェントルマンを特別に送り込んであ・げ・る』
やけに思わせぶりな言い方をした美夏が、電話口でクスクスと笑う。

「いきなりそんな事を言われても……それに、今いるホテルは普通のビジネスホテルだから、来客があつても部屋には入れられない規則になつてるし——』

『そっか。じゃあ、近くのシティホテルのラウンジで待ち合わせにしてあげるね』

「ホテルのラウンジ？　そんなところで待ち合わせとか、緊張するよ！』

『それなら、会つてすぐに部屋に行けるようにしようか？』

「部屋つて……二人きりで？』

『当たり前でしょ。大丈夫。相手は紳士だから余計な心配はいらないって。それに、何をするにしても決めるのは奈緒よ。ただ会つて話をするだけでもいいし、本当の恋人同士みたいにイチャイチャするのもいい。あとは、その場の雰囲気と個人の裁量かな』
どんなシステムになっているのか詳細まではわからないが、以前彼女に聞かされた話では通常でも、それなりのスキンシップはあるようだ。

それにしても、その場の雰囲気と個人の裁量とは、いったい——
詳しく聞こうとする前に今いるホテルの所在地を訊ねられ、少しの間通話を保留にされた。それからすぐに、ここから歩いて五分の距離にあるシティホテルの名前を教えられる。

「ちよつと待つてつてば！ 私、まだ行くとは言つてない！ それに、もうお風呂に入ったあとで、すつぴんに戻つちやつてるし——」

『化粧品メーカーの社長ともあろう人が何言つてんのよ。奈緒の自慢の美肌があれば、すつぴんにササツとアイラインを引くだけでOKでしょ』

奈緒が普段使っている自社製品は、合成化学物質をいっさい使用しておらず、主成分は厳選した国内の植物のみだ。

当然、それで手入れした素肌には人一倍自信があった。けれど、顔は典型的な和風顔で、濃いメイクは似合わないし、髪色も可もなく不可もないダークブラウンだ。

お椀型の胸はお気に入りのパーツだが、特にスタイル抜群というわけでもない。

そんな自分が、とびきりゴージャスでグッドルッキングなジェントルマンとデートをするなんて……

別に自分を低く見ているわけではないが、どう考えてもミスマッチだ。

『せっかくの誕生日だもの。明日のお昼までレンタルしておくから、デート楽しんでき

てね！ 詳しい事は向こうが知ってるし、上手くリードしてくれるから心配いらないわよ。それにね、男で受けた傷は、男で癒すしかないのよ』

美夏が言うには、派遣されてくるレンタル彼氏は姫君をエスコートする騎士のような役割を果たしてくれるらしい。

つまり、主役はあくまでも自分であり、主体性を保ちながらエスコートしてもらえらという事だ。

『言っちゃ悪いけど、元カレにはそんな度量はなかったでしょ？ 日頃頑張つて仕事してるんだから、今日くらいお姫様気分を味わつてみたら？』

確かに一人の女性として、そんなシチュエーションに憧れる気持ちはある。

別に男性に依存したり寄りかかったりしたいと思つていないわけではないが、時には何も考えず大きくて広い胸の中でひと休みしたいという願望がなくはない。

『とにかく、料金はもうカード払いしたし、待ち合わせのラウンジの席もホテルの部屋も奈緒の名前で予約したから。ただし、間違つても本気になつちゃダメだよ。向こうはプロとしてお客様と恋愛ごっこをしてるだけだから。あ、お得意様が来たから、もう切るわ。じゃあね〜』

通話が終わり、気がつけば画面が暗くなっている。

奈緒はスマートフォンを持ったまま部屋の真ん中に立ち尽くした。

指定された時刻は、午後八時。

場所は「ミラフォンスホテル」の三十四階にあるスカイラウンジの窓際。用意するにしても、あと一時間もないし、持ってきているのはビジネス用のパンツスーツのみだ。

「ちよつ……急にそんな事を言われても困るわよ！」

そうは言っても、接客中の美夏に連絡がつくはずはないし、彼女はもうレンタル彼氏の料金をカード払いしてしまっている。

美夏によると「GJ倶楽部」は会員制のかなりグレードの高い店のようで、レンタルされる彼氏達は全員とびきりのイケメンで礼儀をわきまえた人ばかりであるらしい。

しかも、VIP会員の美夏が選んだ特別な男性だ。

それならいっそ、彼女の厚意を受け入れるべきではないか……

そうすれば、このフラれて間もない傷ついた心を多少なりとも癒してもらえるかもしれない。

(そういえば、元カレとまともなデートをしたのって、もうかなり前だよね)

互いの仕事が忙しい事もあり、元カレとのデートは年々頻度が落ちていた。出かけるにしてもせいぜいショッピングか食事目的の外出のみで、泊まりがけでどこかに行ったのは三、四年前だ。思えば、いつの間にか一緒に住んでいる事へのワクワク感もなくなっ

ていた。

そう考えると、浮気相手に言われた「長すぎた春」というのは、的を射ている。

そうこうしている間に、待ち合わせの時刻まであと二十分になった。

もうあれこれと迷っている暇はない！

きつとこれも人生における経験のひとつだ。

美夏が常連になっている店なら信用できるし、間違ってもおかしい事にはならないだろう。

(ただ会って、話をするだけ。いい大人なんだから、それくらいなんでもないでしょ。深く考えないで、せっかくの誕生日プレゼントを存分に楽しめばいいのよ！)

奈緒はそう自分を鼓舞する。それから大急ぎで身支度をして、昼間着ていたライトグレーのパンツスーツに着替えて部屋を出た。

このスーツは決して安物ではない。けれど、色合いやデザイン的に、どう見てもデート用の服装ではなかった。

目的のホテルに行く道すがらには、いくつかのブティックがある。

二度とやってこない二十代最後の誕生日の夜だ。こうなったら目一杯おしゃれをして、最高の時間を過ごそうと心に決め、通りすがりのブティックでレース素材のワンピースを買い求めた。色は黒だが、適度に透け感があつて我ながらかなりエレガントに見える。

試着室で着替えをして、そのまま指定されたホテルに直行した。美夏はホテルのデラックスフロアに部屋まで用意してくれており、フロント経由でラウンジに向かう。

入口の前で時刻を確認すると、午後八時ジャストだった。きつともう、レンタル彼氏の中にいるに違いない。

店の入口に立つと、案内係の女性がにこやかに迎え入れてくれた。

「一名様ですか？」

そう聞かれて、はじめて自分がデート相手の容姿をいっさい聞かされないまま来た事に気づく。

「いえ、窓際の席で待ち合わせをしているんですが……」

中は薄暗く、天井まである窓からは都会の夜景が一望できる。店内に導かれ、フロア全体を眺められる位置で立ち止まった。

窓際を見ると、そこはすべてラウンジ型のソファ席になっており、そのうちのいくつかにはすでにカッブルが座っている。空いているソファ席を探すうちに、フロアの一番奥に男性が一人で座っているのが見えた。

ほかにそれらしき一人客は見当たらないし、たぶん彼がレンタル彼氏だ。

奈緒は案内係に待ち合わせの相手がいた事を告げて、男性のいる席を目指してゆっくりと歩いた。

思えば、こんな場所でデートするのは、かなり久しぶりだ。

ただでさえ慣れていない場所なのに、これから初対面の男性と恋人設定でデートするとなると、いやが上にも緊張が高まってくる。

距離が近くなり、徐々にはっきり見えてきた男性の風貌を見て、奈緒はその人がデートの相手だと確信した。

そこに座っていたのは、いかにも仕立てのよさそうなスーツを着た手足の長い男性で、洋服の上からでも筋肉質なのがわかる。

見た目がゴージャスで手足が長く、適度にガタイがいい人。まさに奈緒のタイプそのものだ。

これはもう間違いない。

念のためもう一度窓際の席を見回してみたが、一人で座っているのは彼だけだ。

奈緒はいったん立ち止まって呼吸を整えると、思い切って男性に声をかけた。

「こんばんは」

声をかけて男性の隣に腰を下ろすと、窓の外を見ていた顔がゆっくりと奈緒のほうを向いた。

「こんばんは」

正面から目が合ったあと、彼の口元にほんの少しだけ笑みが浮かんだ。

奈緒は男性の顔を見るなり、驚きに目を見張った。切れ長の目に、まっすぐ伸びた鼻筋。輪郭から顎のラインまで完璧で、どこを切り取っても非の打ち所がないくらい整った顔立ちをしている。(めっ……めちゃくちゃかっこいい！)

年齢は三十代前半くらいだろうか？

いずれにせよ、まさかこれほど理想的でドストライクな男性が派遣されてくるとは夢にも思わなかった。今日の前にいるのは、間違いなくこれまで生きてきた中で最高にエモーショナルな男性だ。

緊張でバッグを持つ手が震え、奥歯がカチカチと音を立てる。

しかし、いくらイケメンでも相手はレンタル彼氏であり、明日の午後零時まではデートタイムだ。

二十歳そこそこの小娘でもあるまいし、ここで萎縮してどうする！

奈緒は自分を奮い立たせて顎をグイと上げた。

「さっそくだけど、部屋に行きましょう？」

言い終えるなり、男性の片方の眉尻が上がった。若干驚いたような顔をされて、奈緒は自分の言い方が誤解を招いているであろう事に気づく。

いきなり部屋に誘うなんて、変に勘繰られてしまったのではないだろうか？

もちろん、そんなつもりではないし、思っていたよりも隣席との距離が近く話しくいと思っただからだ。

「ここじゃあ落ち着かないし、話すなら部屋でゆっくりしながらのほうがいいと思って。それに、お酒ならルームサービスを頼めるでしょう？」

男性が、微笑んだまま僅かに首を傾げた。

しかし、すぐにソファから腰を上げると、奈緒の左側に立った。そして、掌で前を示すと同時に、奈緒の背中に軽く手を当てて歩くよう促してくる。

「それもそうだな。部屋は何階に取ってあるんだ？」

さすが年上のレンタル彼氏だ。話し方が自然だし、いかにも大人の恋人同士の待ち合わせといった感じがする。

「二十四階よ」

「そうか。だったら、俺の部屋に行こう」

「えっ？」

予想外の返答をされて、奈緒は思わず顔を上げて男性の顔を見た。五センチのハイヒールを履いた状態で目測してみると、彼の身長は少なくとも百八十五センチ以上ある。

それに加えて、男性にはそこにいるだけで周りを掌握するほど圧倒的な存在感があった。

「俺の部屋は三十二階だ。君はまだ夜景を堪能していないだろう?」

ここへ来る時に案内板で確認したが、その階はエグゼクティブフロアのはずだ。

(まさか、スイートルームを取ってるの? もしかして、これも美夏の演出?)

サプライズ好きの彼女の事だから、可能性は無きにしも非ずだ。

けれど、そんな事であるだろうか?

奈緒は密かに首を傾げながら、チラリと男性の顔を見た。

(二十代最後の誕生日だからかな? それにしては手が込みすぎてるような気がするけど……)

そんな思惑をよそに、彼は落ち着いた様子で奈緒をエスコートしてくれる。

店の外に出てエレベーターホールに辿り着くと、男性が立ち止まって奈緒を上から見下ろしてきた。

その視線に射抜かれたような気分になり、奈緒は思わず顔を背けて正面を向いた。

それからすぐにエレベーターがやってきて、二人して乗り込む。中には誰もおらず、

二人きりだ。

男性がスーツの胸ポケットからカードキーを取り出し、専用の文字盤の上にかざした。

エレベーターがゆつくりと下降する間に、奈緒はドアから一番遠い位置に立って彼の全身を左斜めうしろから眺めた。

まっすぐに伸びた背筋に広い肩幅。胸板は程よく厚みがあり、海外のモデル並みにスタイルがいい。艶やかな黒髪はきちんと整えられているし、クラシカルなグレンチェックのスーツを見事に着こなしている。

明るいところで見ると、彼のイケメンぶりがいっそう詳らかになった感じだ。

(さすがVIP会員のレンタル彼氏だなあ。すっごく素敵……!)

これほどのイケメンとデートできる機会など、普通では到底あり得ない。

はじめは大いに戸惑ったし、ついひと月前にフラれたばかりの自分には誕生日を祝う心の余裕などないと思っていた。

けれど、いつまでもくさってなんかいられないし、ここまで来たら、もう引き返すわけにはいかない。

「あの……あなたの事はなんと呼べばいい?」

奈緒が訊ねると、正面を向いていた男性がほんの少しだけ振り返り、自分の肩越しに視線だけ投げかけてきた。まるで流し目を送られたみたいになり、一瞬息が止まる。

「清道と呼んでくれ。君は?」

「奈緒です」

うっかり本名を口にしてしまったけれど、こんな時、馬鹿正直に本当の名前を言うものなのだろうか?

向こうだって本名とは限らないし、今さらながらどう振る舞えばいいかわからなくなってきた。

「わかった。じゃあ、奈緒。行こうか」

エレベーターが三十二階に到着し、奈緒は清道に誘導されて廊下に出た。さりげなく腕を貸されて、彼と連れ立ってカーペットの上をゆっくり歩く。

フロア専用の施設を通り過ぎてさらに進み、一番奥と思われる部屋の前で清道の足が止まる。

「どうぞ」

ドアを開けてもらって部屋の中に入ると、まず目の前に円形のダイニングテーブルセットと四人掛けのソファが見えた。その向こうには広々としたバルコニーがある。左手にも部屋があるようだから、たぶんそこがベッドルームだ。

それにしても、広い！

おそらくスイートルームの中でもかなりグレードの高い部屋だろう。これほど豪華な客室は、写真や映像でしか見た事がなかった。

キョロキョロと辺りを見回していると、清道に見つめられている事に気づいた。

目を逸らして、外の景色を気にするふりをしながら彼の視線から逃れ、窓の前に立つ。
(お上りさんじゃあるまいし、何やってんのよ〜！)

取り繕おうにも、適当な言葉が出てこない。それにしても、これほど豪華な部屋を取るなんて、どういうつもりだろう？

(もしかしてVIP会員のスペシャルサービス？)

当たり前だが、奈緒が泊まる予定だったホテルとは違いすぎる。

そのまま窓にへばりついていると、背後から呼びかけられた。

「奈緒、何を飲む？ せっかくだからシャンパンを開けようか」

シャンパンをボトルで？

これも誕生日プレゼントのうちに入っているのだろうか？

だとしたら、断るという選択肢はない。

一呼吸置いてから、いかにも景色を楽しんでいたふうを装い、にこやかな顔で振り向く。

「いいわね」

奈緒が頷くと、清道が備え付けの冷蔵庫からボトルを取り出してキャップシールを剥がした。

それからすぐにコルク部分に白い布を被せると、手慣れた様子でボトルを左右に動かし始める。

「ポン！」と大きな音がすると予感して、奈緒は咄嗟に身をすくめて両手で耳を押さえた。

けれど、シャンパンは微かにシュツとガスが抜ける音を立てたのみ。

奈緒は拍子抜けして、そろそろと手を下ろした。

（気まずい……。そういえば、本来は音を立てないで開けるのがマナーだって聞いた事があったっけ）

VIP会員しか選べない特別なレンタル彼氏である清道は、女性の扱いに関しては何口の中のプロだ。

それに清道とは、これが終われば二度と会う事はないだろう。そんなふうに考えてみると、にわかには気持ちが悪くなってきた。

勧められるままソファに腰を下ろし、目の前にあるテーブルに置かれたシャンパングラスを手取る。

ひと口飲んでみると、想像以上に美味しかった。目をバチクリさせながら、桃色の泡が底から立ち上っているグラスを眺める。

「美味しい……」

テーブルの向こうには一人掛けのソファがあり、清道がそこに腰を下ろした。

「気に入ったようでよかった。よかったら、これも一緒にどうぞ」

清道がテーブルの上に置いたプレートには、ピンク色の焼き菓子が載せられている。スティッククッキーのようだが、上に粉砂糖が掛かっけていて見た目も可愛らしい。

「ありがとう」

ひとつ手に取って口に入れようとした時、清道が手に持ったクッキーを軽く振って注意を引いてきた。彼はクッキーをシャンパングラスに浸すと、奈緒が見ている前でそれを齧った。

「これ、そうやって食べるものなの？」

「一応ね。もちろん、そのまま食べても構わないよ」

清道が言うには、奈緒がクッキーだと思っていたのはビスキュイ・ローズというビスケットであるらしい。フランスのシャンパーニュ地方で作られているそれは、材料のひとつにシャンパンが使われているという。

「へえ……もしかしてシャンパンって、シャンパーニュって地名が由来なの？」

「シャンパンは、シャンパーニュ地方で造られるスパークリングワインの事をさすからね。だから、そこ以外で作られたものはシャンパンとは言わないんだ」

「あ、なんだかそれ、聞いた事があるかも」

それからしばらくの間、ワインやお菓子について話をした。

アルコールはもとより、スイーツに関してもさほど詳しくない奈緒に対して、清道は驚くほど知識が豊富だった。

シャンパンを飲み進めながら興味深く話を聞いているうちに、話題が原材料にまで及

んだ。

「人に押し付けたり意見したりするつもりはないが、何を作るにしても材料にはある程度こだわったほうがいいのは確かだ」

「私もそう思う。自然派を謳って極端な話をするつもりはないけど、これだけはどうもものにはとことんこだわりたいし、ぜったいに譲れない信念があるもの」

清道が大きく頷くのを見て、奈緒は我知らず前のめりになった。

「もちろん、そう言い切れるだけの理由も自信もある。だからこそ続けられるし、頑張っ

て築き上げてきたものの良さを全国の人にわかしてもらいたいと——」

つい熱くなつて、うっかり仕事モードで自社製品をアピールしそうになってしまった。

せつかくの誕生日デートに、いったい何をしているんだか……

つくづく可愛げも面白みもない女だ。

きつと、こんなだから浮気された挙句、一方的に別れを告げられてしまうのだろう。

「ふふっ……」

我知らず苦笑して、グラスに残っていたシャンパンをグイと飲み干す。なんだかんだ言つて、未だに元カレとの別れを引きずりまくっている自分が情けなさすぎる。

空のグラスを持つ手が止まった時、急に涙が込み上げてきた。唇を噛みしめて我慢していると、立ち上がった清道が腰かけていたソファを離れ奈緒の隣に移動してきた。

「大丈夫か？ 何か吐き出したい事があるなら遠慮なく話してくれ」

清道が座つたのはソファの端で、奈緒がいる位置から一人分距離が離れている。

彼の話す声は落ち着いており、気遣いを感じつつも押し付けがましくない。おそらく、これまでに何百人という女性の相手をして、たくさんの愚痴や泣き言を聞かされたはずだ。

清道なら、ぜんぶ吐き出しても受け入れてくれるに違いない。

元カレの事を少しでも忘れられるなら——

そう思った奈緒は、こくりと頷いたあとゆっくりと口を開いた。

「実はね……」

奈緒は思いつくままに元カレとの出会いから別れまでのいきさつを話し始める。

はじめて会ったのは、大学の友達がセッティングした食事会という名の合コン。たま

たま正面に座っていた事もあり、話をして連絡先を交換した。

それからなんとなく付き合い始め、互いに結婚を意識したのをきっかけに同棲がスタートした。

でも、はしゃいでいたのは最初だけで、徐々にときめきがなくなつてマンネリ化した関係に陥っていた。

今思えば、そうと気づきながら放置していたのがいけなかったのかもしれない。

そのうちスキンシップすらしなくなり、セックスストレスになっていた。だからといって仲が悪くなったわけではないが、いつの間にか恋人というよりは仲のいい異性の同居人と化していただけだ。

「私だって、最初はおしゃれしてメイクも頑張ってたんだけどなあ。でも、一緒にシヨッピングに行つてよきそうなワンピースを試着してもまるで興味がなみたいだし、そのうち私服なんかどうでもいいやつて思うようになってしまった。」

その分、仕事用の洋服にお金をかけるようになった。いいものを着ていると思えば自然と自信がつき、士気も上がった。

「そしたら、不思議と交渉も上手くいくようになって、業績がアップしたのよ。そうなる仕事に対する意欲がグリーンと上がっちゃって、わき目もふらずに頑張ったらもつと成果が出て、どんどんビジネス脳が活性化されて——」

元カレの話から仕事の話に移った途端に、どんよりとしていた気持ちが晴れやかになる。

「いいものを着ていけば気分が上がるのは当然だ。それは仕事や言動にも作用するし、一緒にいる相手にも伝わる。奈緒の仕事が上手くいくようになったのは、君が自分を正しくコーディネートしたからだよ」

「あ……ありがとう」

清道の言葉を聞いたあと、別れ話を切り出した元カレに言われた台詞せりふがフラッシュバックする。

『奈緒は仕事ばかりしてたじゃないか。だから、寂しくて浮気してしまったんだ』

『僕に対して気を遣わなくなっただけか、家では女を捨ててたよね』

『家事もおろそかになってたし、正直言つて一緒にいる意味がわからなくなつてた』

今思えば、それらしき事は普段からそれとなく伝えられていた。けれど、忙しさにかまけてそれをスルーしていたのは自分自身だ。

「確かに元カレよりも仕事を優先してたし、休みの日はノーメイクで一日中だらだらしてた時もある。気も遣えてなかっただろうし、家事も行き届いてなかった。でも、この数年がむしろに頑張ってきたからこそ、今があるの。だから、後悔はしてないわ」

清道は時折相槌あいづちを打ちながら、黙って耳を傾けてくれている。そして、話が途切れたのを待っていたように、奈緒のグラスにシャンパンを注ぎ足してくれた。

「奈緒が仕事を優先させた気持ちもわかるし、君がそれに納得しているのなら元カレとの別れは必然だったんだと思う」

清道から差し出されたビスキュイ・ローズを受け取って、グラスの中のシャンパンに浸しじた。

生地がほろりと溶けて、ふんわりとした甘さと優しいほろ苦さが口の中いっぱいに広

がる。

「それに、自分に対して気を遣わなくなったあの、家事がおろそかになってたあの、元カレは王様か何か？ 子供じゃないんだから自分の面倒は自分で見るべきだ。おおかた奈緒にいろいろと依存した生活をしてたんだろうな」

呆れを通り越したような表情を浮かべる清道を見て、心がふっと和んだ。

元カレはさておき、仕事以外で男性とこんなふうに話すのは、いつ以来だろうか。

「もしかして奈緒は、元カレの浮気の原因は自分にあると思ってるんじゃないか？ もしそうなら、その考えは改めるべきだ。どんな理由があるにせよ、浮気は相手に対する裏切り行為だ。悪いのは元カレであって、奈緒じゃない」

頭では元カレに対して激しく憤っていたし、最悪の別れ方を選んだ最低の男だと思っていた。

けれど、心のどこかでは、浮気の原因は自分にあると思っていたみたいだ。

「不満があるなら話し合って解決すべきだろう？ それをせずに浮気に走った元カレは、男として最低のやつだ。少なくとも、俺はそう思うね」

きっぱりと断言され、元カレと別れて以来ずっと引きずっていた錘のようなものがふっと消えてなくなったような気がした。

「奈緒は外見だけじゃなく中身も魅力的な女性だ。元カレは器が小さい上に、審美眼を

持たないやつのような。今聞いただけでもかなり自分本位な考えの持ち主だし、その程度の男とは別れて正解だったんじゃないか」

そう言ってグラスを傾ける清道に倣って、シャンパンを立て続けに二口飲む。

ずっと胸にあった苦い思い出が清道の言葉で浄化され、シユワシユワと音が立つシャンパンの泡とともに消えていく。

「男の人の口からそう言ってもらえて、すごく嬉しい。元カレと別れて以来ずっと動けずにいたけど、ようやく目の前の扉が開いたって感じがする」

奈緒が微笑むと、清道も同じように口元を綻ばせた。

「それはよかった」

清道は短く返事をして、それ以上余計な事は言わない。そんなところも好感が持てたし、さりげなくこちらを気遣ってくれているのがよくわかった。

「清道ってすごいね。今夜会ったばかりなのに、あなたのおかげで救われた気がする。……本当は、待ち合わせの場所に行こうか行くまいか、すごく悩んだのよ。でも、思い切って来てよかった。美夏に感謝しなきゃね」

「美夏？」

「そう、私の親友で、『GJ倶楽部』のVIP会員なの。聞いてなかった？」

清道が頷き、空になったグラスをテーブルの上に戻した。

「ああ、それは聞いてなかったな。じゃあ、今日俺達が会えたのは美夏さんのおかげで事か」

「そうよ。だって私、『GJ倶楽部』の会員じゃないもの。それに、清道はVIP会員のレンタル彼氏なんでしょ？ 美夏は出張先で一人ぼっちの誕生日を過ごしている私を可哀想に思っ、て、清道を派遣してくれたの」

「なるほど……そういう事だったんだな」

「何杯目のシャンパンを注ぐと、清道が奈緒を見つめながら華やかな笑みを浮かべた。奈緒、誕生日おめでとう。今日という日を君と過ごせて光栄に思うよ」

清道がグラスを掲げ、奈緒もそれに倣った。

「ありがとう」

極上のシャンパンと、どこを取ってもパーフェクトな美男子。

奈緒の口元に自然な笑みが零れた。

「出張先と言っていたが、こっちには仕事で来たのか？」

「そうなの。明日の朝早くに東京へ帰るつもり——だったけど、清道は明日の昼まで私の彼氏でいてくれるんだよね？」

「ああ、そうだ」

「だったら、もう少しゆっくりしてから帰ろうかな……なんて思ったりして……。あつ、

べ、別に深い意味はないのよ？ ただ、もっと話したいなって思っただけで……美夏もそうするだけでもいいって言ってたし、本当に他意はないの！」

焦るあまり、しどろもどろになり、なんだかおかしな感じになってしまった。ありのままを話そうとしているだけに、やけに意味深長に聞こえてしまうのはどうしてだろうか？

それとも、言っている自分が自意識過剰なだけなのか……

清道はいえ、そんな奈緒を眺めながら謎めいた微笑みを浮かべている。

「美夏さんは、ほかにどんな事を言っていた？ つまり、俺が所属してる倶楽部のシステムの話はしたのかな？」

「少しだけ……会って話をするだけでもいいし、本当の恋人同士みたいにイチヤイチャするのもいい。あとは、その場の雰囲気と個人の裁量かなって……。向こうが上手くリードしてくれるから心配いらないと——」

「そうか」

清道が、おもむろにスーツのジャケットを脱いだ。

真っ白なシャツの下で、筋肉が盛り上がりながら動く。今まで比較的普通に話せていたのに、そんなしぐさを見せられたせい、か、ふいに胸が高らかに鳴り響き始める。

「少し立ち入った事を聞くけど、いいかな？」

脱いだジャケットをソファの背もたれにかけたあと、指をネクタイにかける。そして、結び目を左右に動かしながら、ゆっくりとネクタイを緩めてシャツの一番上のボタンを外した。

自然と彼の手元に目がいき、そこから視線を外せなくなる。

清道の手は大きく、指が長い。爪は綺麗に切り揃えられており、手の甲には太い血管が浮き出ている。首元のボタンを二つ外したあと、彼は左右のシャツの袖口そでぐちを緩めた。

ようやくそこでハッと我に返ると、奈緒は視線を彼の顔に戻して咳払いをする。

「どうぞ」

「奈緒は、ついひと月前に恋人と別れてメンタルがズタボロになった。結婚の約束までしていたんだから当たり前だし、ものすごく辛かったと思う。それでも仕事は放棄せず、ギリギリで精神力を保ちながら頑張ってきた——そんな感じだった？」

「そうね」

短く返事をする声が震え、奈緒は喉元に込み上げてくるものをグッと呑み下した。

「誕生日の今日も、仕事のため出張先で一人過ごしている。だけど、仕事の満足感は何られても、奈緒が負った心の傷はそう簡単に癒えるものじゃない。そうじゃないか？」

訊ねられて、奈緒は深く頷いて唇をきつく結んだ。

「忙しさはメンタルを保つのに役立つが、仕事ばかりしていたら身体がもたないぞ。遅

かれ早かれ皺寄せがくるし、そうなる前に別の逃げ道を見つけたほうがいい」

確かに、仕事に逃けている自覚はあった。

けれど、仕事のほかにフラれた現実から目を背ける術すべがなかった。だから、毎年二人で祝っていた誕生日にわざと出張を入れて、元カレから少しでも遠い場所に逃げ出したのだ。

今頃元カレは、新しい彼女と一緒にいる。そして、元カノの誕生日などすっかり忘れて、新しく手に入れた幸せを一杯満喫しているに違いない——

彼に対する愛情なんかもう残っていないはずなのに、どうしてそんな事を思ったり、未だに心が痛くて仕方がなかったりするのだろうか？

「私だって、そうしたい……。でも、ほかにどうすればいいの？ 美夏は男で受けた傷は、男で癒すしかないって言うけど、忙しくて新しい出会いを求めてる暇なんかないし、そんな気力すら残ってないわ」

奈緒は項垂うづたれて下を向いた。

「だから、俺がここにいるんじゃないのか？」

問いかけるようにそう言われて、奈緒は顔を上げて清道を見た。

「男で受けた傷は、男で癒すしかない——美夏さんは、奈緒を現状から救い出すために、俺をレンタルしてくれたんだろう？」

清道が奈緒に向かって手を差し伸べてきた。

目の前にいる男性はこの上なく魅力的で、きつと受けた傷を一瞬で忘れさせてくれるだろう。

奈緒は、おすおすと彼の手の上に自分の掌を重ねた。

その手を強く握られて、身体中にビリビリとした電流が走る。繋いだ手を引かれ、あつという間に清道との距離が近くなった。

間近でじつと見つめられ、声が出せなくなる。

力強い彼の手と、優しい微笑み。

今まで見た事もないほど魅惑的な目と、匂い立つほどの男性的な色香。それに、触れてみてはじめてわかる肌の質感と温度――

ついさっきまで普通に話せていたのが嘘みたいだった。

萎縮してしまいそうなほど圧倒的なオーラに全身を包み込まれ、奈緒はただ呆けたように清道の目を見つめ続けた。

「レンタル彼氏とは会って話をするだけでもいいし、本当の恋人同士みたいにイチャイチャするのもいい。あとは、その場の雰囲気と個人の裁量……そう言ったね？」

繋いでいた掌が少しだけ離れたと思ったなら、すぐに指が絡んできた。掌を合わせたまままギユツと強く手を握られる。

たったそれだけの事なのに、もう身体ばかりか心まで清道に囚とらわれたようになってしまふ。

「言った……」

ようやくそれだけ返事をする、彼の顔が近づいてきた。

遠くからではわかりにくかったが、清道の目はやや緑がかった焦こげ茶色だ。そんな色の目を見たのははじめてだし、これほど強い胸のときめきを感じた事もなかった。

「ずるいようだが、俺から仕掛けるわけにはいかない。……だけど、もし奈緒が今の雰囲気を楽しとして、個人の裁量を俺に委ゆたねてくれるなら……俺ともっと親密な関係にならないか？ そうすれば、元カレの事なんか綺麗さっぱり忘れさせてやる。嫌か？」

まるで身体が頭からガラガラと音を立てて崩れていくみたいだった。

今までどうにか保っていた理性がどこかに飛んでいき、体面などかなぐり捨てて清道に縋すがり付きたくなってしまふ。

「嫌じゃない……清道っ……」

言い終わると同時に背中を抱き寄せられ、唇にキスされた。

すぐに舌が絡み合い、息を弾ませながら互いの唇を貪めり合う。

キスを続けながら二人の手は忙しく動き回る。背中中のジッパーを下ろされ、ネクタイを外す手を止めてワンピースの袖から腕を引き抜く。

清道が着ているシャツの前を開け、ベルトのバックルを外した。想像していた以上に引き締まった身体を前にして、奈緒の手が一瞬だけ止まる。イケメンレンタル彼氏のルックスの良さは、顔だけではなく全身にまで及んでいた。奈緒は、いつの間にか緩んでいたブラジャーをかなぐり捨て、彼の手を借りながらショーツを脱いで床に放る。

ここまできて、キスだけで終わるはずもない。

双方とも裸になり、ソファの上に折り重なるようにして横になった。

唇を合わせたまま大きな掌で乳房を揉み込まれ、早々にあられもない声を上げる。座面はゆったりとしており、転げ落ちる心配はない。

奈緒は清道の背中に腕を回し、口の端から唾液が伝い下りるほど激しくキスを交わし続けた。

「あ、んっ……！」

彼の唇が奈緒の首筋を下り、肌を舐め回しながらデコルテを経て乳房に移った。

胸元を見ると、上目遣いに奈緒を見つめる清道の視線とぶつかる。

彼は薄く開けた唇の隙間から舌を覗かせ、乳暈をなぞるようにゆつくりと乳房を舐め始めた。

「あっ……あ……」

見つめられながら胸を舌で愛撫され、頭の芯がジンジンと痺れてくる。

これほどいやらしく胸を舐められた事なんかなかったし、ましてや目を合わせながらなんて……

そろそろと先端に近づいていく舌先が乳首を捕らえて、先端をピンと弾いた。

「ひっ……」

思わず声が漏れ、目の周りが熱くなって視界がぼやけた。

乳房をやわやわと揉み込んでくる指が白い肌にめり込み、硬くなり始めた乳首をツンと上向かせる。

「や……らし……」

震える声で呟くと、清道のキスが唇に戻ってきた。ねっとり舌を絡められて、息をするのもやつとになる。

「いやらしいな。だけど、奈緒はこれからもっと、いやらしい事をする。そうだろ？」

今日会ったばかりの男性とこんなふうになるなんて、どうかしている——

そう考えた途端、美夏の教えが神の啓示のように頭の中に浮かび上がった。

『男で受けた傷は、男で癒すしかないのよ』

どこか運命のようなものを感じて、奈緒は自分から清道の唇にキスをした。

「どうせなら、思いつきりいやらしくして。少しくらい乱暴でもいい……気持ちよくて、

何もかも忘れてしまうような、破廉恥で呆れるくらい大胆なセックスがしたい」
きつと、こんな台詞を口にするのもこれが最初で最後だ。

思いつめたような目で見つめる奈緒に、清道がゆっくりと頷いた。

「いいよ」

低く響く声が、奈緒の長く枯れていた欲望のスイッチをオンにする。

「奈緒の言うとおりにしてあげるよ」

彼の優しさが肌に染み入り、すべてを委ねてしまいたいという願望が奈緒の心をいっぱいにする。

唇に貪るようなキスをされ、どちらのものかわからなくなるほど舌を絡め合う。

こんなキスをしたのははじめてだし、性急に求められる感じが忘れかけていた官能を呼び起こしていくみたいだった。

「奈緒のぜんぶ、見せてくれるか？」

清道に囁かれ、頷くと同時に身体から余分な力が抜けていく。

キスが乳房に戻ってきて、まるでリングゴでも鬩るように肌をそっと歯で引つ掻かれる。「綺麗な胸だね。口の中で蕩けそうに柔らかくて、ずつと舐めていたくなるよ」

「あ、んっ……」

元カレの愛撫は長くても五分程度で、その間にスムーズに挿入できるよう濡れておか

なければならなかった。

キスの合間に会話をするわけでもなく、優しい言葉や淫らな台詞で気持ちを盛り上げるわけでもない。ただ単に唇を合わせ、おざなりに乳房を舐めるだけだった。そんな状況で自然に濡れるのはかなり難しく、時には湿度が足りないまま挿れられる事もあった。そうかといって、こちらから何かしてほしいわけでもないように、愛撫が終わるとすぐに挿入の準備をして上にのしかかってくる。目的は射精であり、愛撫などあってないようなものだった。

けれど、清道のキスと愛撫はぜんぜん違う。言葉どおりに奈緒の乳房を執拗に舐め回し、口全体で味わうように食んだり、吸い付いたりしてくる。

「今、ちょっと上の空になってただろう。もしかして、元カレの事を考えてた？」

清道が両方の乳房に手を添え、舌で乳嘴をつつきながらそう訊ねてきた。

「ご、ごめん……。だって、こんなふうにされた事がなくて……」

奈緒が見ている前で、彼がこれ見よがしに舌先で乳暈の周りをなぞり始める。

「大丈夫。気を悪くしたわけじゃないから、謝ったりしなくてもいい。そうか……こんなふうにされた事がないのなら、もっとしてあげないといけないな。余計な事なんか考えている余裕がなくなるくらい、気持ちよくしてあげるよ——」

言い終えるや否や乳房にちゅつと吸い付かれ、上顎と舌で乳嘴をすり潰すように挟み

込まれる。

仰け反った背中を左腕ですくわれると同時に、キスが下腹に移動した。

右の掌が奈緒の左太ももを、ゆっくりと撫で下ろす。

閉じた脚の間を少しずつ広げられて、左脚をソファの背もたれに引っかけるような姿勢を取らされた。

奈緒はハッとして肘を立て、上体を起こそうとする。

けれど、思うように力が入らず、ただもがくだけに終わってしまった。

「やっ……こんな格好、恥ずかしいっ……」

「奈緒は恥ずかしがり屋だな。これから、もっと恥ずかしい事をしようと思ったのに、もう降参か？」

いかにも残念そうな顔をされて、起きようとする気持ちが一瞬時に消えた。じっと見つめられているうちに、だんだんと息が上がってくる。触られてもいないのに、脚の間がしつとりと濡れてきたのがわかった。

きつと清道もそれに気づいているに違いない――

いずれにせよ、今さら後戻りする気なんかなかった。

「俺は奈緒を癒したいんだ。奈緒の全身にキスをして、外だけじゃなく中も奥もすべて俺のものにする。奈緒が降参するまで何度でもイカせて、これからは俺とのセックスし

か思い出さなくなるように、特別に淫らで一生忘れられないほどいやらしいセックスをしてあげるよ」

あからさまに誘われ、奈緒は大きく胸を上下させながら清道を見つめた。

「……わかった。もう邪魔しない。私のすべてをあなたのものにして……」

蚊の鳴くような声でようやくそれだけ言うと、奈緒は立てた肘をソファの座面に戻した。

けれど、自分が何をされているのか直視する勇氣はない。

奈緒が目を閉じて覚悟を決めると、ふいに額に温かな呼吸を感じて目蓋を上げた。

「ベッドに行こう。ソファだと思いきり暴れられないだろう？ さて、どうやって奈緒を連れて行ってあげようか。お姫様抱っこがいいかな？ それとも、荷物みたいに肩に担がりたい？ なんなら、おんぶでもいいよ」

ジェスチャーまじりでそう言われ、思わずクスツと笑ってしまった。

きつとこれも、気持ちをはぐそうとする彼の気遣いなのだろう。

「じゃあ……お姫様抱っこで。あ、でも……おんぶがいいかも。……うん、やつぱり肩に担がれたほうが——ん、っ……」

迷いまくる唇をキスで封じられ、ほんの数センチの距離で目が合った。

「ふっ……さては、裸を見られたくないんだな？ だったら、目を閉じたままベッドま

で行くから安心してお姫様になろうか」

「きゃあっ！」

奈緒の驚きをよそに、清道がお姫様抱っこをしてきた。

およそ五十キロの重さがある奈緒を軽々と抱き上げた彼は、目を閉じたままそろそろと部屋の奥に向かつて歩き出した。

「その代わり、奈緒が俺を誘導してくれ。そうでなきゃ、大事なお姫様の脚をどこかにぶつけかねない」

清道が至って真面目な顔でそう言い、奈緒はクスクスと笑いながら彼をベッドルームまで案内した。おかげでかなりリラククスできたし、目を閉じている清道の顔をじつくと堪能できた。

清道の顔はどの角度から見ても完璧で、思わずため息が零れるほどの美男だ。

セクシーであるだけでなく茶目つきもあるし、人を無条件で信頼させてしまう不思議な魅力まで兼ね備えている。

ようやくベッドに行きつき、奈緒は清道に抱かれたままベッドの上に倒れ込んだ。

彼は仰向けに寝そべった奈緒を挟むようにしてベッドに手を突き、サイドテーブルから小袋を取り出して軽く振った。

黒地に赤い薔薇模様の小袋の中には、言うまでもなく避妊具が入っている。

さすがプロフェッショナルは用意がいい。

それに、きちんと避妊をするとわからせてくれるところも女性に対する配慮が行き届いている。

相手はプロなのだから、この際ぜんぶさらけ出してしまったほうがいい——そう考えた奈緒は、愛撫を再開しようとする清道の腕に手をかけた。

「実は私、もうずいぶんセックスしてないの。だから、上手くできないかも。つまりその……私じゃ清道は満足できないかもしれないから、先に謝っておく——」

話している途中で手を取られ、それを彼の下肢に導かれた。

指先に何かが触れ、それが清道の男性器だと理解して、奈緒は真っ赤になる。とても大きくて、ものすごく硬い。

それがほしくてたまらなくなり、奈緒は我知らずゴクリと唾を飲み込んだ。

「その反応、初々しくて可愛いな……。もうわかっただろう？ 奈緒が心配してるような事は起こらない。セックスは上手下手よりも、お互いを欲しいと思う気持ちのほうが大事だ。だから、きつと上手くいくよ」

話しながら近づいてくる唇が、奈緒の目の上にキスをする。

「じゃあ、そろそろ本気を出させてもらおうよ。今度こそ、待ったなしで」

「………わかった」

奈緒は小さく頷くと、顎を上向けて彼のキスを唇に受けた。

あれこれと言った挙句、何度となくストップをかけて清道の邪魔をしてしまったが、今はもう奈緒のほう待ちきれなくなっている。

清道の大きな掌が奈緒の身体の上を這い、徐々に下に向かっている。

それを追うように彼のキスが首筋から乳房に、腰回りから臍の下に移動する。

両脚が清道を挟むようにして左右に大きく開かれ、彼の手に誘導されるまま膝を立てた。

見られている――

そう思うだけで心臓が早鐘を打ち、無意識に花房が震えだす。

「奈緒……たまらないよ……。奈緒のここに、キスしたい……。いいか？」

その声に頭を持ち上げて下を見ると、清道が今にもそこに唇を押し当てようとしているところだった。

奈緒は息を弾ませながら頷き、清道の舌が秘裂を舐め上げるのを見つめる。

「いつの間にこんなに感じてくれてたんだ？　もう挿れてほしくてたまらないみたいだね」

清道の指が蜜窟の縁をなぞり、舌が花芽の先をチョンとつつく。

「あっ……あ、ああっ……！」

奈緒は突然やってきた強い快感に反応して、大きく背中を仰げ反らせた。

そこを愛撫された経験がないわけではない。

けれど、それをしたのは指であって、唇や舌じゃなかった。

脚の間から聞こえてくる水音を聞きながら、奈緒は生まれてはじめて、本当の愛撫の気持ちよさに恍惚となる。

これが前戯でしかないなら、今まで経験してきたセックスはなんだったのだろうか？

内側から込み上げてくる愉悦が、全身の肌を熱く粟立たせる。

「いきなりは辛いだろうから、先に少し指でほぐすよ」

視線を合わせながら花芽の先をチロチロと舐められ、一瞬目の前がばあつと明るくなった。

歯がカチカチと鳴り、身体中にさざ波のような快楽が湧き起こる。

「あっ……清道っ……」

シーツをきつく掴む奈緒の身体が、何度となくビクビクと跳ね上がった。

「はっ……は……あ……」

今、確かにイッた。

奈緒はこれまで、セックスでは一度も達した事がなかった。挿入されても中が気持ちいいと思った覚えはなく、いつも不完全燃焼のまま終わりを迎える。

いつか見た雑誌でも女性の大半はそんなものだを書いてあったし、それが普通だと思っていた。

それなのに、花芽をちよつと舐められただけで果ててしまうなんて——
舌と指で呆気なく達してしまった自分に、驚きを通り越して感動すら覚えた。

前戯だけでも、これまでに経験してきた愛撫とはまるで違う。これで実際に彼に抱か
れようものなら、本当に昇天してしまいたいそうだ。

奈緒がオーガズムの余韻に浸っていると、清道の指が蜜窟の中にツパンと入ってきた。
途端に中がきゆうきゆうと収縮し、ギリギリと彼の指を締め上げるのがわかる。

今までこれほど深く感じた事はなかったし、身体がこんなふうに対応するのをはじめ
でだ。

中を丁寧こに捏ね回され、奈緒は掠れた嬌声きょうせいを上げながら身をくねらせる。

「中……熱い……指……気持ち……い……あんっ！ ああああっ！」

たぶん、また軽くイッてしまった。

奈緒は喘あえぎながら身体を起こし、清道に向かって片手を差し伸べる。

「ギユって、して……」

奈緒がねだると、清道がすぐに応じて背中を抱き寄せてくれた。

「もっと、強く……。息……できなくなるくらい……ん、っ……」

清道に強く抱きしめられ、唇にキスをされる。たったそれだけなのに、ものすごく嬉
しい。

本当の恋人でもないのに、これほど心が揺さぶられるなんて……

彼は、お互いを欲しいと思う気持ちまごころが大事だと言った。

それならば、清道も少しは自分の事を欲しいと思ってくれているのだろうか？

キスが終わり、彼と睫毛まぶげが触れ合う距離で見つめ合う。清道がまた唇を重ねながら、
低く囁いてくる。

「挿れて、つてねだつてくれ」

下唇を軽く囁まれ、背筋に甘い戦慄せんりつが走った。

そんな言葉を口にした事など一度もないし、言いたいと思った記憶もない。以前見た、
ちよつとアダルトな海外ドラマの中で聞いた覚えはあるけれど、実際に自分が言う機会
が巡めぐってくるなんて想像した事もなかった。

けれど、今の自分が言うべきなのは、まさにその言葉だ。

「い……挿れて……」

絞り出すように口にした言葉が、奈緒の身体をいつそう熱く火照ほてらせる。いざ口にし
てみると、自分がいかにそうされる事を熱望しているかがよくわかった。

「そうか、奈緒は挿れてほしいんだね。じゃあ、今度は何をどこに挿れてほしいか、言っ